

和
怡補急
急
急
急
急

九



繪本審鑑卷第六目錄

百六十六

達磨辨玉

百六十八

一指を造る

百六十九

一花を造る

百七十

一葺きを造る

百七十一

面壁を造る

百七十二

徳山入門棒

百七十八

烏臼搥

百七十七

武帝達磨

百七十九

隻履を造る

百八十

沙衣を造る

百八十一

板齒を造る

百八十五

結鼠大蘿蔔

百八十七

深的二丁座

百八十九

徳山未跨棒

繪本審鑑卷第六目錄

百七十四

南泉一虎同答

百七十五

文殊無著同答

百七十三

偽山仰山拈茶同答

百七十六

藥山拈者

百七十二

梁子贊茶

百七十七

新德滅燭

百七十一

首山竹篋

百七十八

曹山因寄

百七十

盤山拈肉大快

百七十九

百甚磨磚

百六十九

百泉美菜

百八十一

迦葉作舞

百六十八

南泉一多和

百八十二

作山半月結

百六十七

作山割一割

百八十三

資福一圓相

百六十六

南迦老比丘

百八十四

展石坐位處同答

百六十五

黃蘗虎考

百八十五

麻石拈湯

百六十四

百丈野瓶

百八十六

黃蘗大後後

百六十三

泗水橋

百八十七

布袋

百六十二

河間世末

百八十八

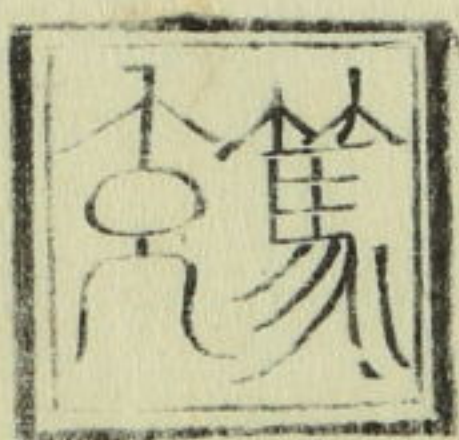
悟達國師

書曰于安由子越之繪本室鑑之後
目錄之端

龍跳取明水 湔瑕審鑑清

傳神千歲後 光耀昭群生

岫雲軒主林元叟題



百六十六 達磨辨玉

達磨六

香反王

入才三

此由子也

あれは

不王希

有の玉

とつと

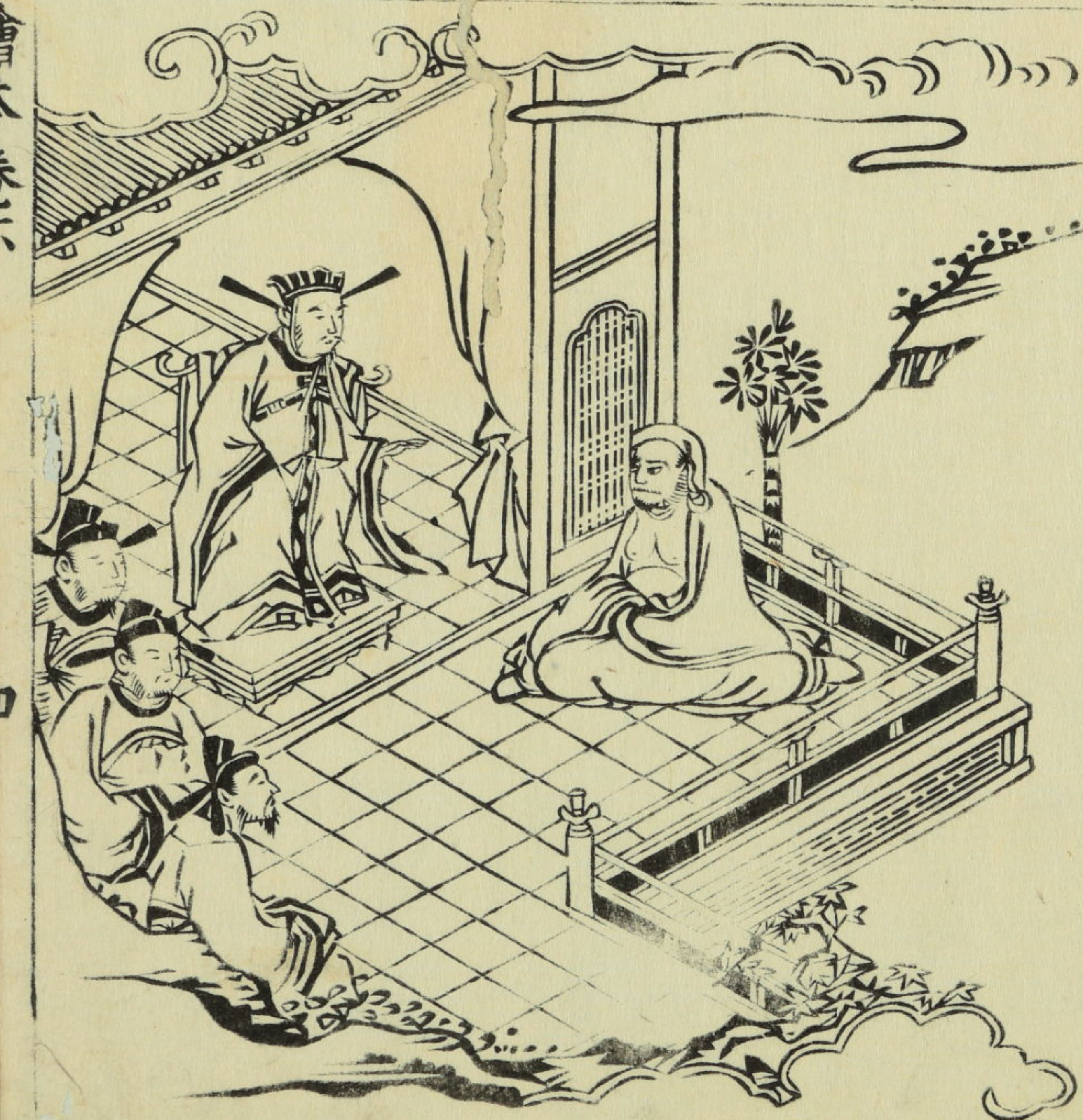
とつと

にんせ



らせらるるに才三の王ふハびまきよの寶に何んは
 我ハ何法あしくハ室とわのりもと信んぬらるる
 なりそその危に殺若多解そが近臣わわくい
 しが皆はくばと感ドるしあり。解ふるも解ハ
 大まのいれはる依なり
 百五十五 武帝 武帝 武帝
 梁の武帝 因ふ和祖 達磨 大伴 西天より海へ
 伝ひ来りて金陵とよふ所よりく帝は母を
 帝の如何を聖徳の中一義作の云廓然云聖
 帝れ云朕は對しんるの和祖の云不識帝
 契りん作蓋し盧と折くはと後と魏と

高小帝
 奉志
 云小回徳云
 の云階下
 人として
 帝の徳の
 らん徳の
 云これハ
 知んる人
 何ん人
 何ん人

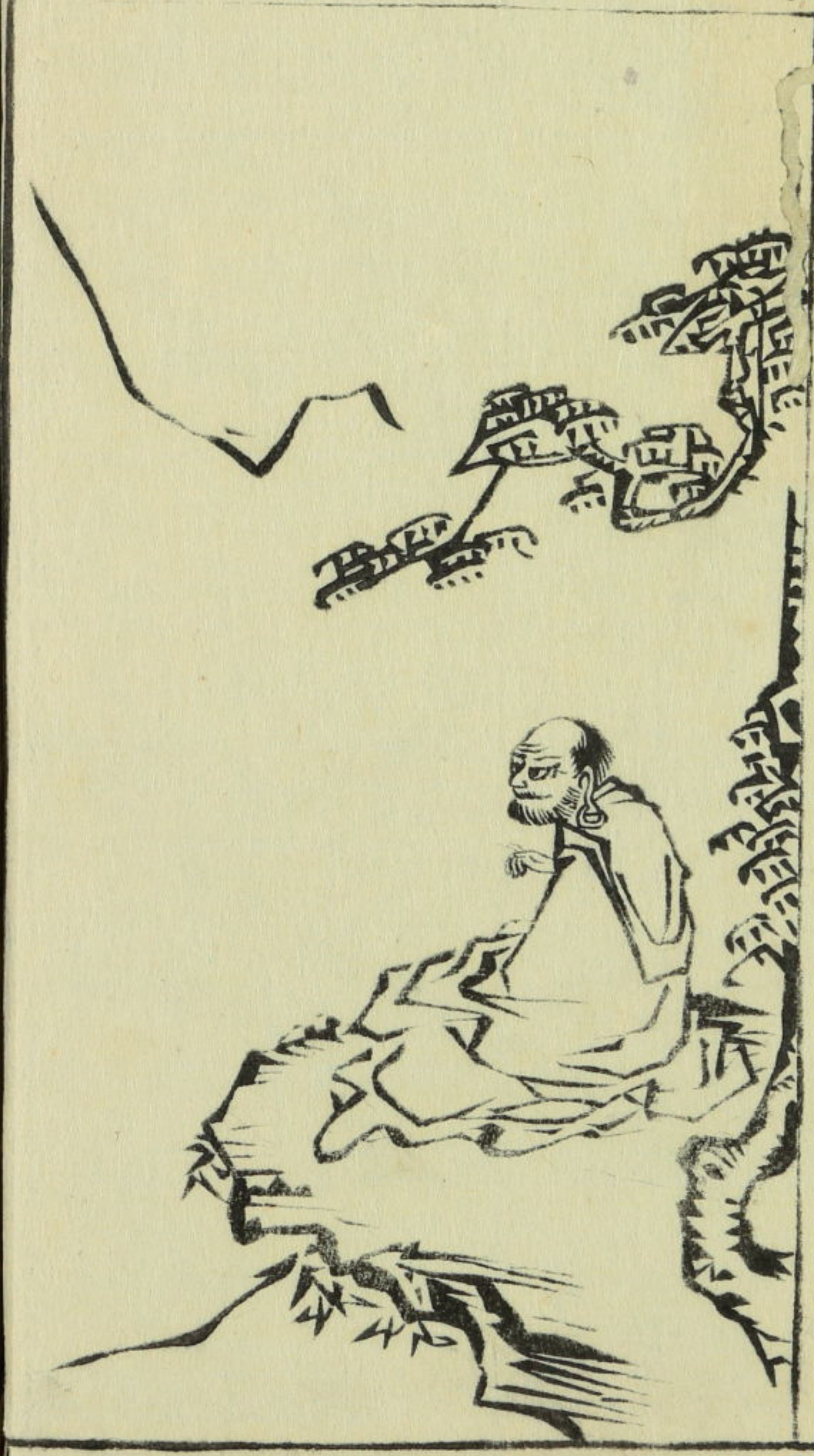


會本卷二

徳太子の云々... 徳の云々... 徳太子の事... 徳太子の事... 徳太子の事...

百卒八 一括達磨

直指 人心 見性 成佛



百五十九 隻履達磨

徳太子の事... 徳太子の事... 徳太子の事... 徳太子の事... 徳太子の事...

三年花
 ちの中
 竊去れり
 所
 失ひ



百字 一華達磨

一花開五葉

放庭雪

人腰

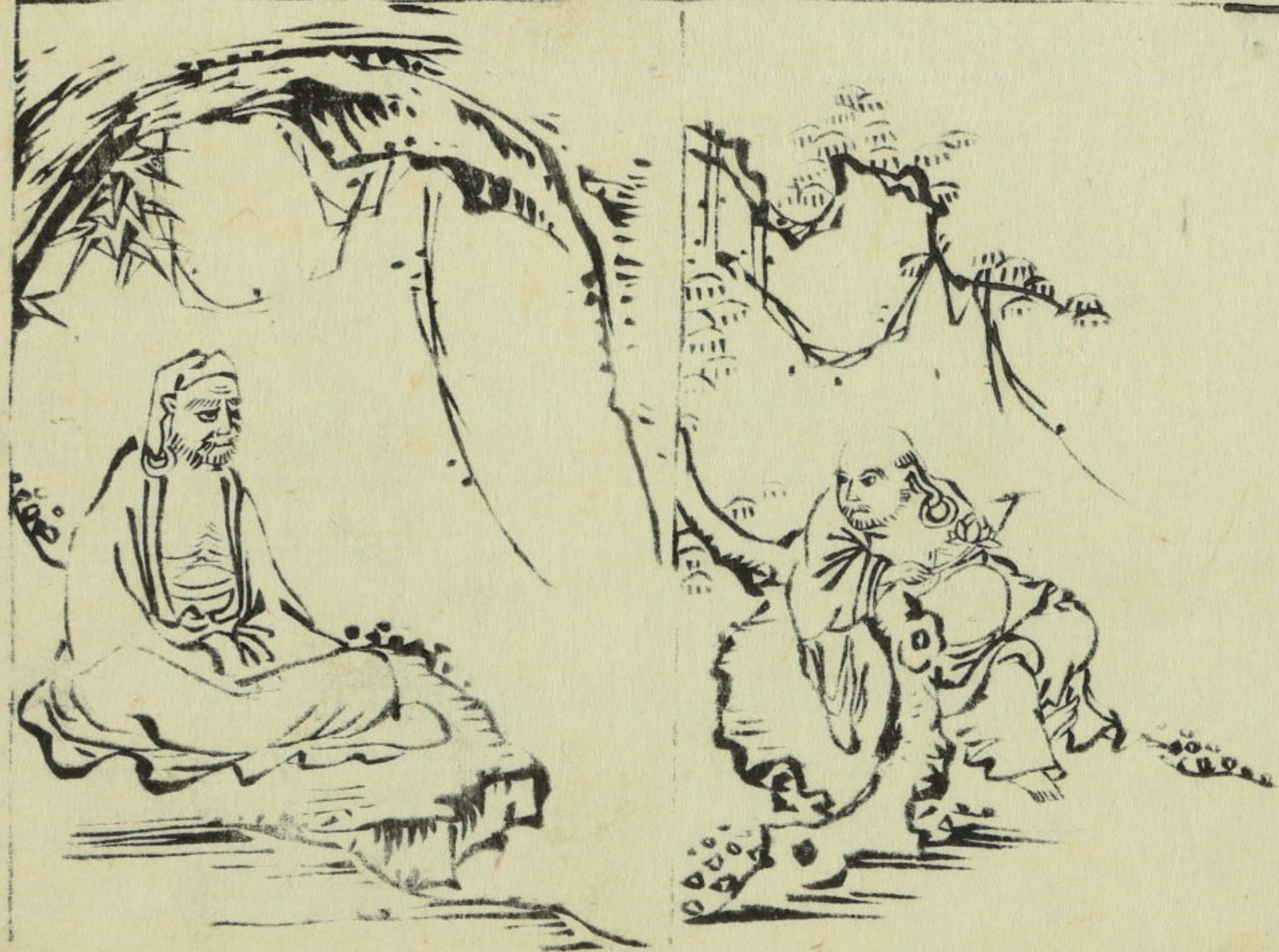
百字 御衣を磨

外洲赤緑橋

大系根

東土西天示

衲僧様



繪本卷六

百字二 一草達磨

廓然無聖

逆龍鱗一草

横江

百字之 板面達磨

希叟達磨忌拈香

不紹金輪尊貴位

被人打落

當門齒



百字に 面壁達磨

達磨嵩山の少林も小於く面壁するは九年人

これと剛とあり時

これと壁觀婆

羅門とつた竹杖三

子云作梁より繩子

歩く洛陽少林も

面壁するは九年

年と纏る二種小

はと竹杖とあり

達磨初めハ二種教



乗と云く是行を好まず心印と傳く執と云く
宗と云く是所説教外別傳不立文字直指人心見
性成佛也

百六十五 鎮列大蘿葡萄

傍の註列
兼聞 和為
親南泉子見
と 是 否 列 曰
鎮列 大 蘿
葡萄 頭 ともす
と云く



百六十六 徳山入門棒

徳山の鑿棒
作初蜀小
立く全剛
經と講むか
其が也
月全剛と号
はなる方
乃程宗と
圓く是行
由車小疏



妙と載て罵と初新潭身を濁す世を
何及と云は凡俗此には入と云くハ使持
百五十七 深明ニと産

深明の二と産因り淮河のつろく人乃網と
重き小ひ川の羅網より逃むれと見たり明
と産の云深見後たうれ一小苗の初傍よ似
より深の云とわくあつと云くと云
初網羅のつろりつろりつろりつろりつろり
水の云深見らんじ候と云くと云くと云く
しつろりつろりつろりつろりつろり

方り者とと云く



百三十八

鳥白棒

鳥白棒作 小傍向を
 誰甚や又云定列作
 の云定列の法乃這
 表と何れ云別あり
 比作の云ありあは
 せんバ又子傍中
 持しれくそく後
 お傍は云指ひま
 眼わりるものこ
 人と打とあは



作乃云今り一と打とととと又打とととと
 偽役あはる。作の云届指え来人の喫とらり
 ある所り云物柄和あるの表小ありとといんか
 せん作乃云此より要をば山傍ゆり回せん偽
 せんあましく作の云中一の指と奪く作と打と
 三下作の云届指く偽の云人の喫とらり
 あり。作の云あし小ヶの儀と打とと偽礼の
 作の云却て与度小吉や偽大発とくか作の
 清の云度清の云度
 百三十九 徳山未跨棒

會本卷六

者ハ三十棒時ハ偽
 ありあぐ礼とありす。
 作 俊打 偽云 某甲
 佐也 回と云ふる
 俊打 作の云ふれ
 ハ 云ふれ 乃 字の
 人 云 新羅人 作
 の云いも 船 船
 跨 云と云 三十棒
 と あり あり



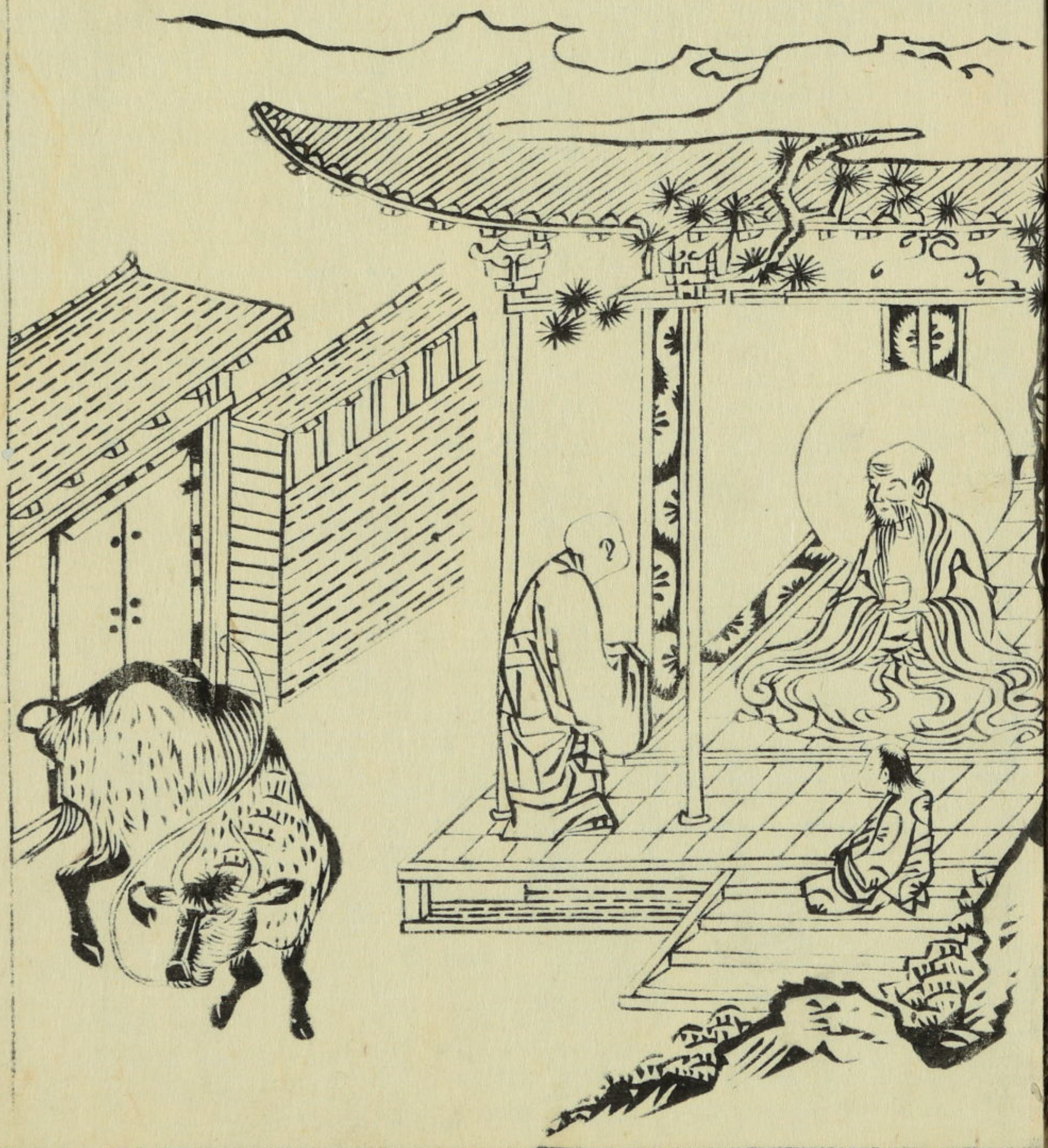
南泉一虎同答

百字 南泉一虎同答
 松山の賢禪師 問 家畜
 泉川二人 お侍と 道長
 虎より 何なり 好し 南泉
 何ふら 向先の 虎ハ 何に
 似たり 何ふら 又 賢禪師
 云ふ 何は 何なり と 何ふ
 又 南泉云 何 泉の云 大
 鬼に 何なり と



受戒とらやいさや。そよ名の曰受戒とく久し。菴の曰汝
 有執心あらんむ。おんぞ受戒と用いん。そよ名辭とく
 退く。菴童子におまうじ。そよ名菴童子に曰前と
 修うく。そよ少そと考と大徳とふ。そよ名無名無名と
 童乃曰。そよ多少そとそよ名境とく曰。けとばつるの
 名。そよ名。童の曰。けと全劉寔の教ありありそ
 名。悽然悦彼菴ハ即又殊あり。再ひるるそ
 即童とて響そ有とく。れハそ一そ在別ととるそ
 童偈と伝とく曰。面とよ真あり。佐表の具と表
 り。真あり妙香と吐。心表り。真あり。是珍寶
 そ法そ深そ其そ事とそ言。乞とく。均控もちと俱そ

受戒とらやいさや。そよ名の曰受戒とく久し。菴の曰汝
 有執心あらんむ。おんぞ受戒と用いん。そよ名辭とく
 退く。菴童子におまうじ。そよ名菴童子に曰前と
 修うく。そよ少そと考と大徳とふ。そよ名無名無名と
 童乃曰。そよ多少そとそよ名境とく曰。けとばつるの
 名。そよ名。童の曰。けと全劉寔の教ありありそ
 名。悽然悦彼菴ハ即又殊あり。再ひるるそ
 即童とて響そ有とく。れハそ一そ在別ととるそ
 童偈と伝とく曰。面とよ真あり。佐表の具と表
 り。真あり妙香と吐。心表り。真あり。是珍寶
 そ法そ深そ其そ事とそ言。乞とく。均控もちと俱そ



東より来りて後て見んと時より陰列菩提寺此修
修政等ありとて尚山石震乳乃をりとて其
因之湯とみる山ありとめぬ

百七十一 偽山仰山摘茶問答

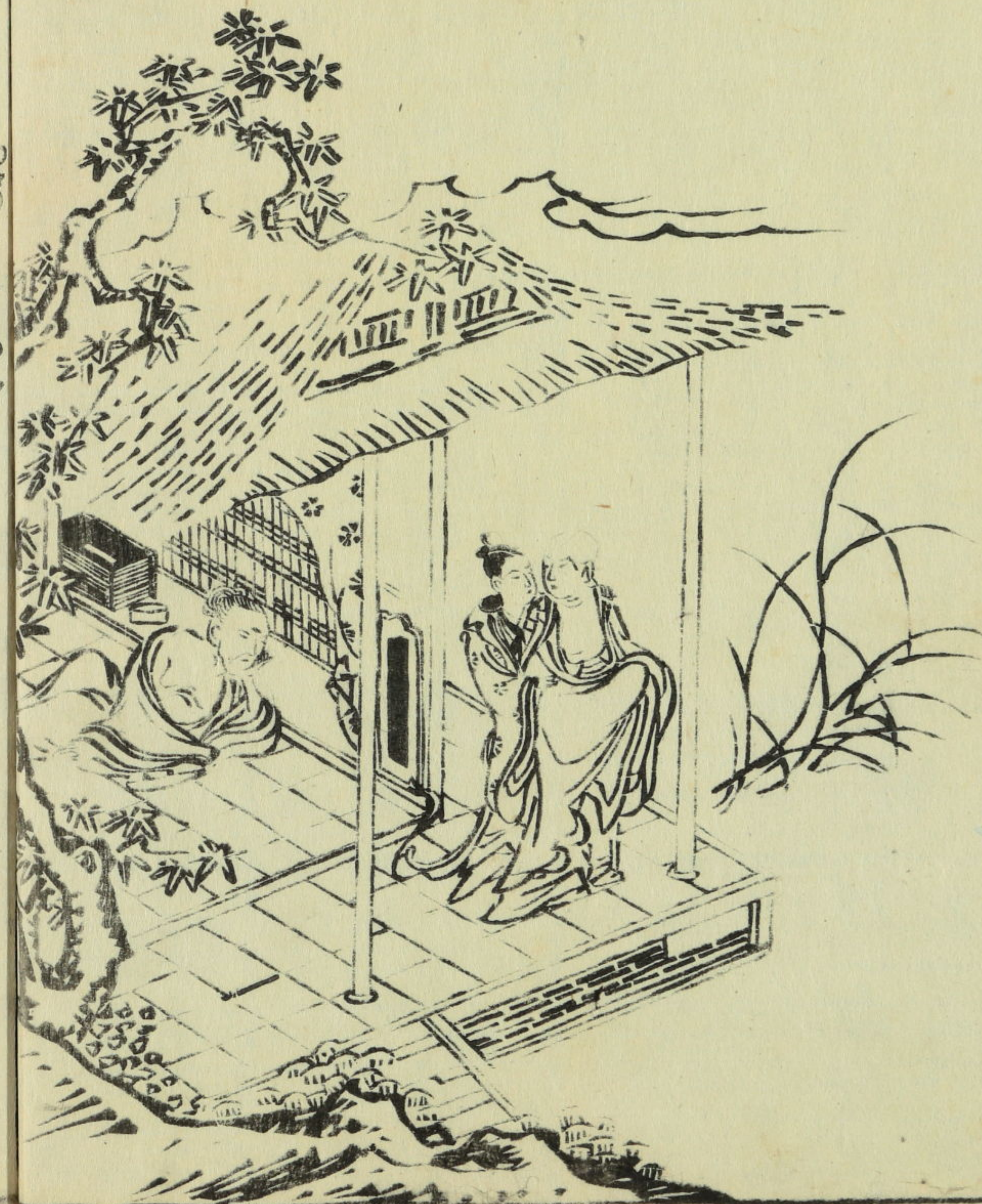
偽山仰山と茶とつじ次流曰終日只子が知とて
子か知と人にと仰遂よ茶樹と撼らん偽の曰子
之用とゆくと仰とゆくと仰の曰和尚かん偽久
そくをを仰の曰とそ所とゆくと其真とゆくと
偽の云子と二十枚と教と仰の曰和尚の持茶甲
喫と茶甲持飯と云くと喫とめん偽の云子
二十枚と教とと云是の云且た色を平をふを



百七十二 薬山拈者

薬山乃倣福作一日道名や云義言う山海と海山

百七十五 龍潭滅燭
 德山圓了 於潭
 紫竹徑中
 造之而時
 解之者
 然潭之
 一夕
 然潭之
 何之
 德山對
 潭乃

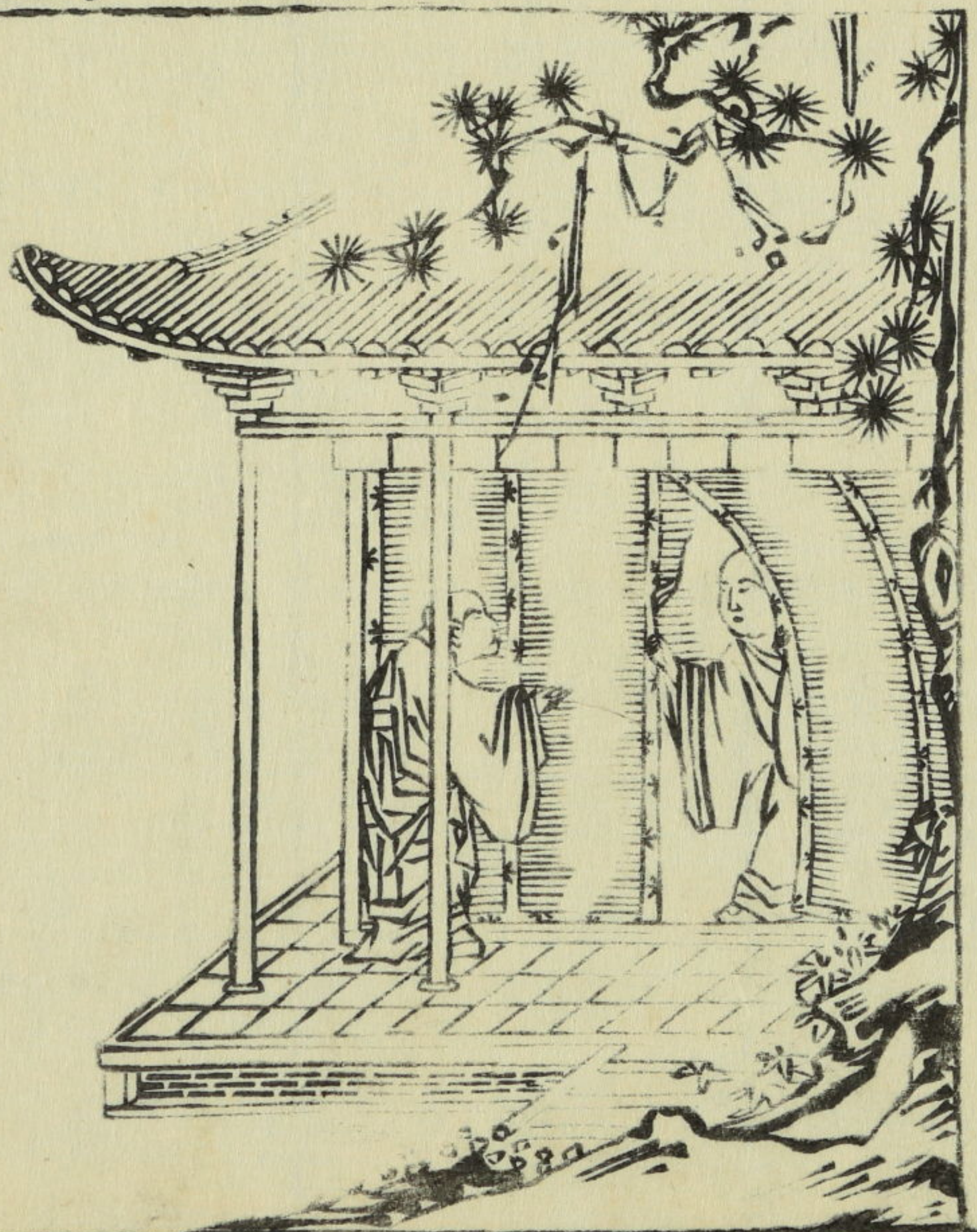


龍潭滅燭

十一

繪本卷六

十一



仙苑の曰竹とて今より向去天下しを和者の
 香気と疑ひたり。便及新撰仙苑の
 曰可中一つの漢のり牙銀樹のくは血並小
 たり。梅打をて此と回くは他阿流筆頂上小
 くと吾道とて之と其んと云く

百七十六 首山竹筴

首山竹筴を振く傍少の喚ぐ竹筴とるるは則
 筋喚て竹筴とるるは則は首山竹筴とるるは則
 下り控り



百七十七 曹山問聲

曹山乃本寂禅师。後知とて乃云何耶。何耶。何耶。何耶。
 の云和者甚麼。作云我心と打云人

天下の人と教をとりつれ
 流し舟を家江西へ
 関



百年

南泉黄蘗

黄蘗の運
 佛印因り
 高僧乃次
 自泉の云
 如許のた
 杖十北見
 大益と載
 仲の云子
 大千世界
 總不家許



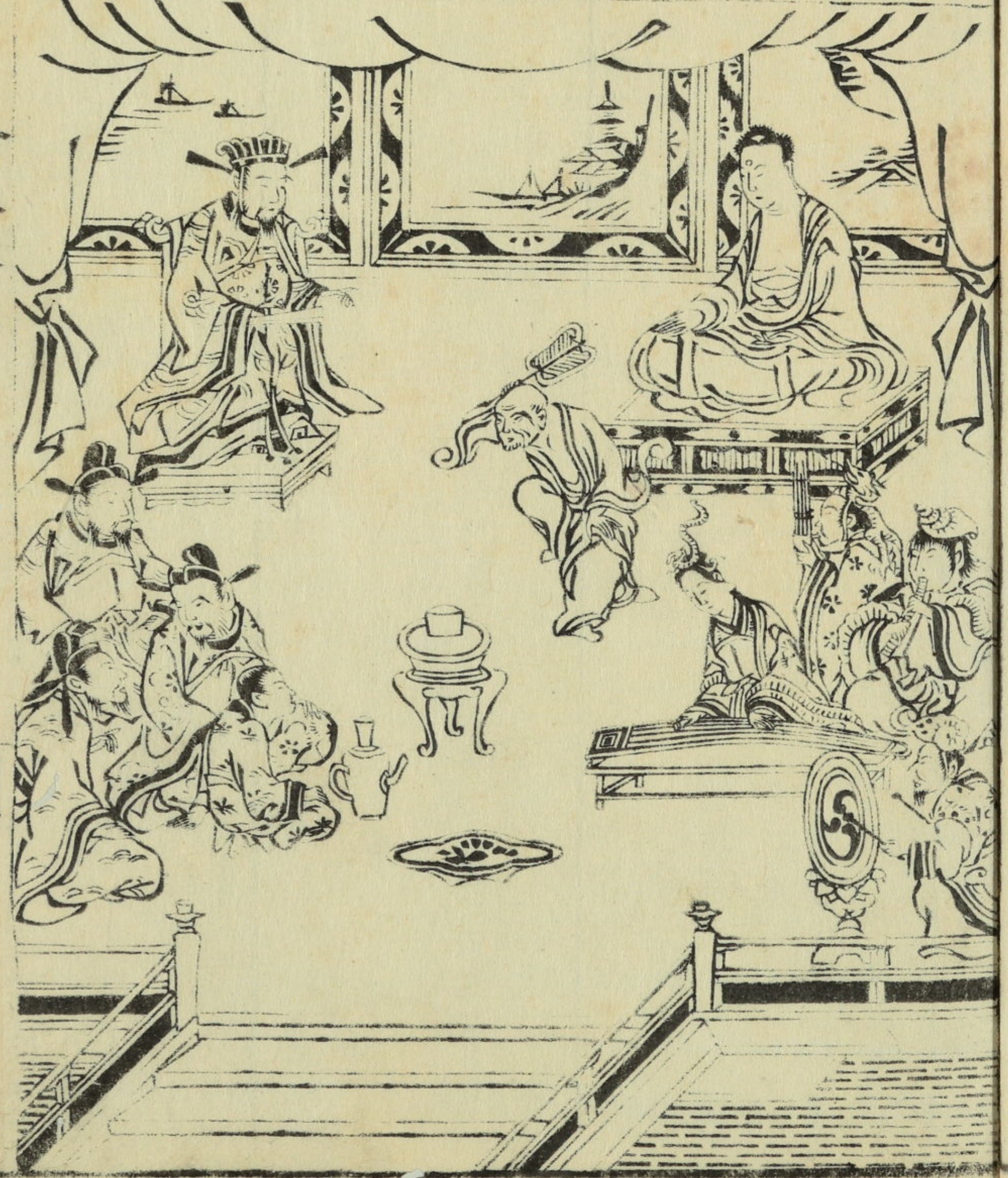
曾不卷六

而の。象の云王老師咏師望と戴く後作

百十一 迦葉作舞

世子因于乾園降王樂之献其其时山河大地皆奏
とある。如象起之舞とあり。王同如象置之何れ
侯作之信後己よるふりもどや何れ之より好む
佛の海に實は修りなしほと修りしありは王又
琴を修りしと二編が象亦二及舞と作王の曰を
系舞とあり置之ありとや佛の海に實は修り
と舞とあり王の曰世も何れを交納とあり佛の
海に舞とあり海と修りしと何れ地もふり
琴がとあり子置之ありとや王の曰信の海に

如象 亦復 曰れ 二の 小象 以曾 舞と あり。 王乃 信受



百半二 南泉一系相

南泉一系相
 南泉麻谷と
 同姓と忠國
 神に得と中
 上子於と一圓
 相と畫と云
 道均ハ即去ん
 宗因相中り
 於と畫と云



彼女人想とあり。作の云と磨とて。別とて。宗
 云と喜慶の心行と。作の相とて。回とて。圓
 作と礼とて。作
 百半三 仰山半月話
 仰山寂像作。一月梵像あり。身は作地とて
 於と半月乃相と畫。像をあらと。作とて。

脚とて。掃部と

作とて。磨と

作とて。掃部と

彼とて。出



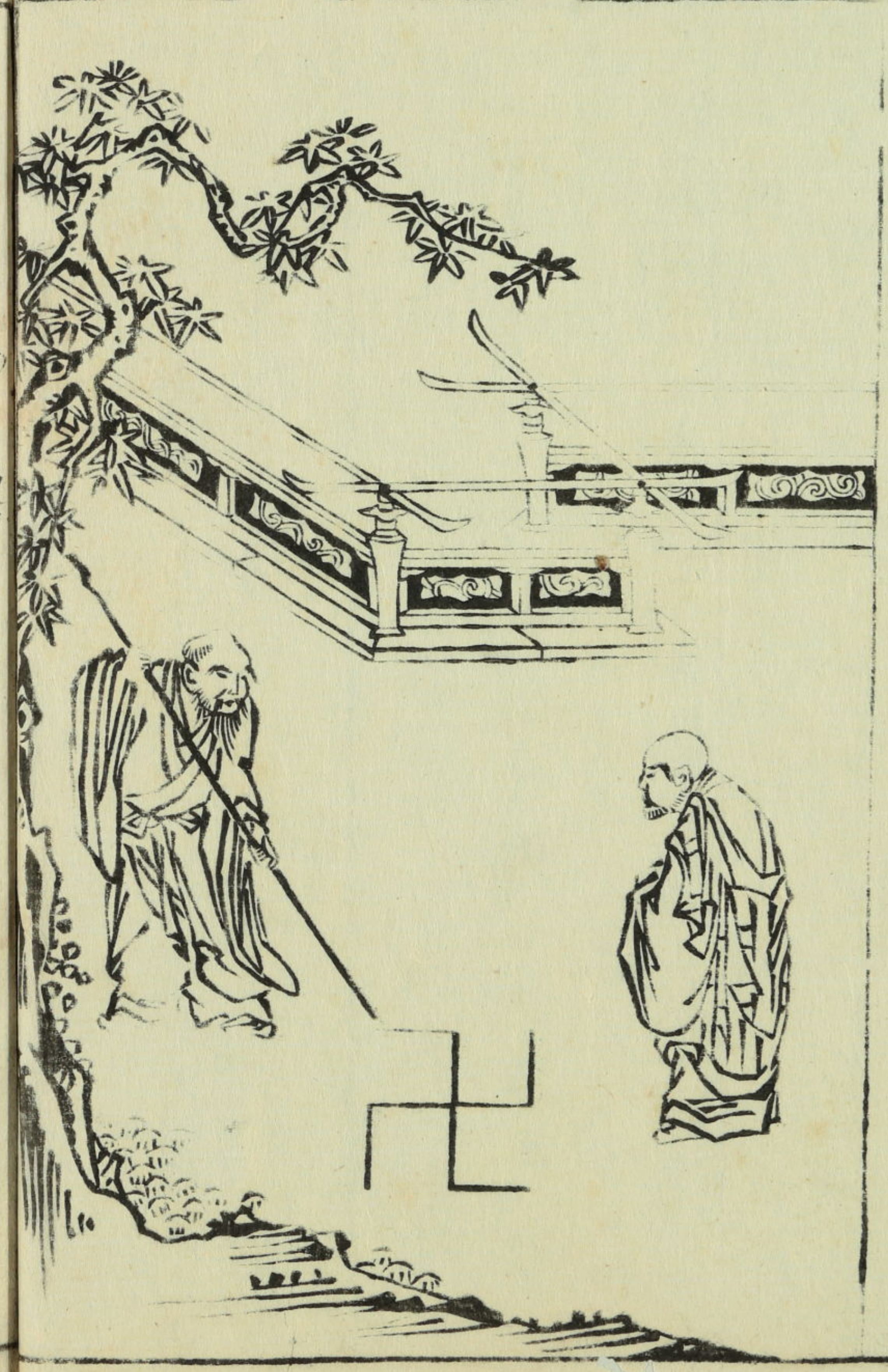
百八十 仰山畫一劃

仰山洪州の石亭子に在りて漸後小室せり傍ありて
 同和尚を尋ぐ字と識やいさや。昨の日記に傍山
 傍乃在る換取と一画と云そ何んか字を昨
 此とよ移くケの十の字と書くと傍又たは換と
 と一画と云そ何んか字を昨十の字と改めて
 卍字とあり傍一画相と書くと又よと云く花と
 て。修羅日月と書ふ小なる勢とありて云これ何んか
 字を昨乃傍と書て卍字と圍却傍すか
 傍玉の勢とありて昨の云如是と此は徳公の護
 とありの所亦如是吾亦如是吾自護持せよ

其傍礼拜 志く之騰く去

御本卷六

廿三



百字五 貨福一香相

此乃福以寶自經
作圓小陈操
其書外師便
一香相と書陳云
弟子と書麻ふ外
とてん
子乞授と云
どね文り書
ねと書子海人
師中に於く
一息と云陳云

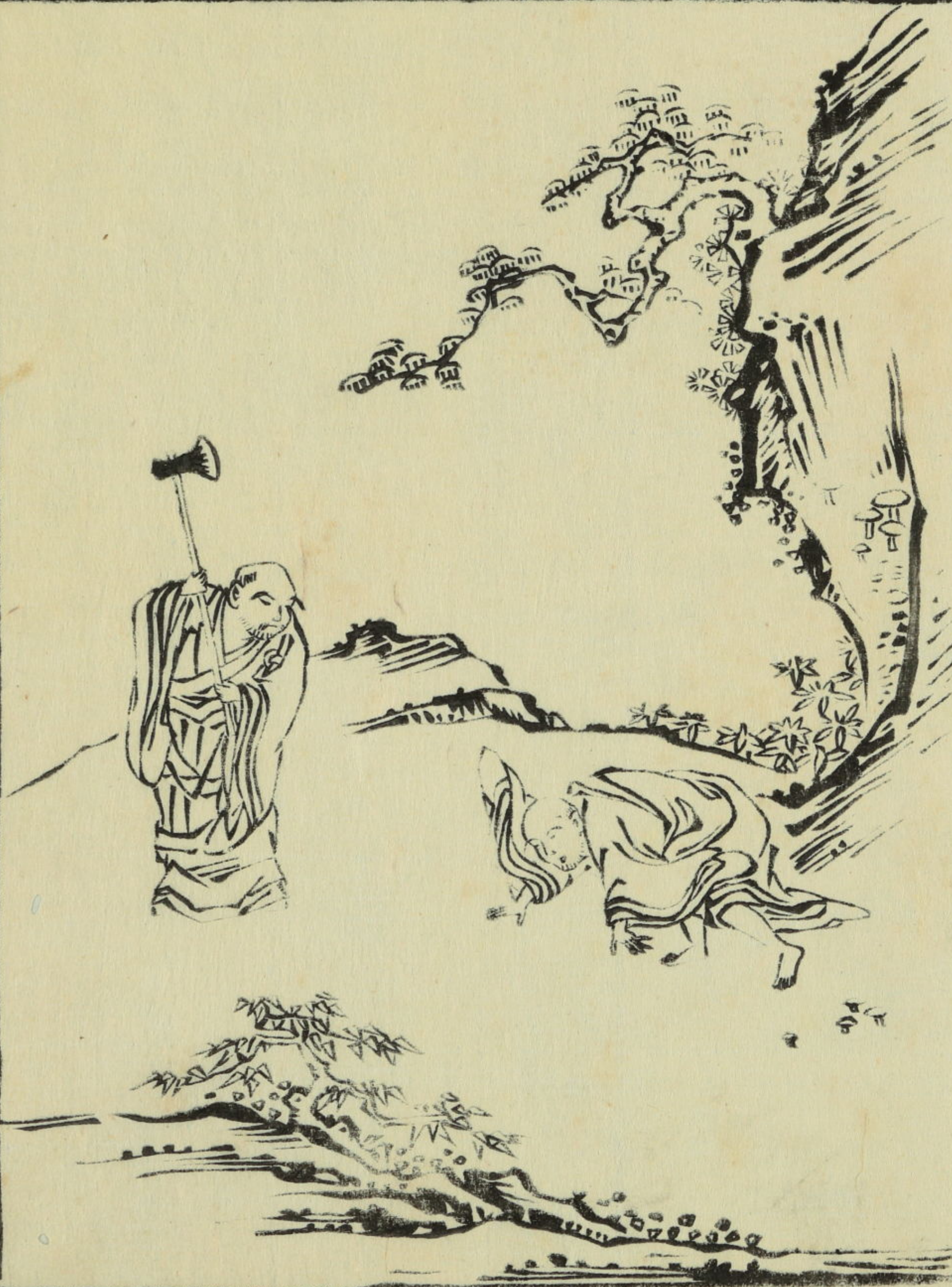


會之卷六

廿四

百八十六 南陽忠國作
忠臣傳 因子傍あつと事終お作 一巻おの中に日の字
と書きしり 傍あつと事
百八十七 龐士仰覆回各
仰山居上よあつと折子と立終お士終終お折と事
百八十八 黄龍去虎聲
黄龍大雄山より 菊子と捕来終 百丈回と 曰大は雲と
見らやと耐 黄龍身のころと虎のころとあく虎の形
と事しれより 百丈 斧とつと回勢と

かゝる也



百八十九 麻呂持湯

麻呂持湯

給とおまの教の示

給と振と一下を

給と振と一下を

給と振と一下を

給と振と一下を

給と振と一下を

給と振と一下を



百八十九 麻呂持湯

麻呂持湯 給とおまの教の示

給と振と一下を

給と振と一下を

給と振と一下を

給と振と一下を

給と振と一下を

給と振と一下を

給と振と一下を

給と振と一下を

大廉生方の曰は法は是迄ケの及理な所はと云

百九十一 黄塚大儀後

黄塚大儀後 故小大儀後と云ふ事はに之儀其の

脚と洗ふこれハ黄塚大儀後 是小志行 あれども

と云ふべしありんともあり。ありとに黄塚大儀後ありあひぬ

母より一子の事 我ハあつて母より一子と云ふ事 黄塚大儀

曰一子も家丁れども九族天より生れ天より生れと云ふ

此れ黄塚大儀後と云ふ事 母と河の中へ蹴り置けり

そのとに黄塚大儀後と云ふ事 天人て降り母と此年

天よりびと降りてありと云ふ事 公衆と云ふ事と云ふ事

かゞびも黄塚大儀後と云ふ事 癡人より黄塚大儀後と云ふ事

此れ黄塚大儀後と云ふ事 今黄塚大儀後一人あり 他人と云ふ事

母と此れと云ふ事 黄塚大儀後と云ふ事 黄塚大儀後と云ふ事

此れ黄塚大儀後と云ふ事 黄塚大儀後と云ふ事 黄塚大儀後と云ふ事

いりて黄塚大儀後と云ふ事 孝の人の事 黄塚大儀後と云ふ事

佛と云ふ事 孝の人の事 黄塚大儀後と云ふ事 黄塚大儀後と云ふ事

二ヶの事 黄塚大儀後と云ふ事 黄塚大儀後と云ふ事 黄塚大儀後と云ふ事

り 黄塚大儀後

百九十二 洞山独来橋

洞山独来橋 独来橋と云ふ事 洞山独来橋と云ふ事

不本橋と云ふ事 独来橋と云ふ事 独来橋と云ふ事 独来橋と云ふ事

え
ふとあつち。本移と教下と



百のチ三 布袋

ゆゑの布袋和尚は、まゝに姓氏を詳よとて、祇園寺に
腰懸し、通例用事よ、法衣に或人回らよ、是
ありともあす。善く云ヶの人、好むとま、川云びと
事なり。善く云。ぬ。是。遠ヶの人よ、何ヶに或ハ布袋
と解て、百の僧よ、或ハ拈鉢と人よ、示さると云。
遠ヶのこ、是。兜率内院。或ハ袋よ、おわく、果てと
探りて、僧よ、何ヶに、傍接とんと、擬と、作、下、れ、ら
よと、端く云。ぬ。是。遠ヶの人よ、何ヶに、或ハ僧、此、行
る、何ヶに、く、と、あ、り、ら、背、と、掛、と、一、下、に、傍、履、と
回、せ、ば、ど、れ、つ、ら、云。我よ、一、文、被、と、何、と、よ、あ、り、と、さ、ハ

布袋ぬのうろと傍たがひく終日熱腫いぢり正ただありひの起たく市井いちいきのり
 2ゆ、小児こゝろ俸まがひあ、それと逐おありひの杖えんぎ杖えんぎとひく
 ころあれありひの杖えんぎ杖えんぎとひく、児ことふたりの杖
 傍たがひあり、いりあり、是こゝろ程ほど師し在ある意いと四よと、
 布袋ぬのうろと下したあ、又またふあて立た傍たがひ云い、これ列り
 又また子こありあり、内うち布袋ぬのうろと抱かかて肩かたに負おく、去い
 う、今いま給たまふらん、此こゝろ布ぬの袋うろハ、これあり、又また唐
 の末すえ傍たがひ契せき此こゝろ形かたち腰こし接つけ、はひひ布ぬの袋うろハ、これあり、又また唐
 布ぬの袋うろ和わ者しやと号なふと、又また宋そう船せんり、明めいと、傍たがひ和
 々々、肚はら大おほあり、世より布ぬの袋うろと程ほどハ、又また元げんの季き米
 論ろんの法はふ氏しが男おとこ空あか魚いさなつ、こゝに臆おそ腫しゅ擁よう持ぢ人にん成ぢ

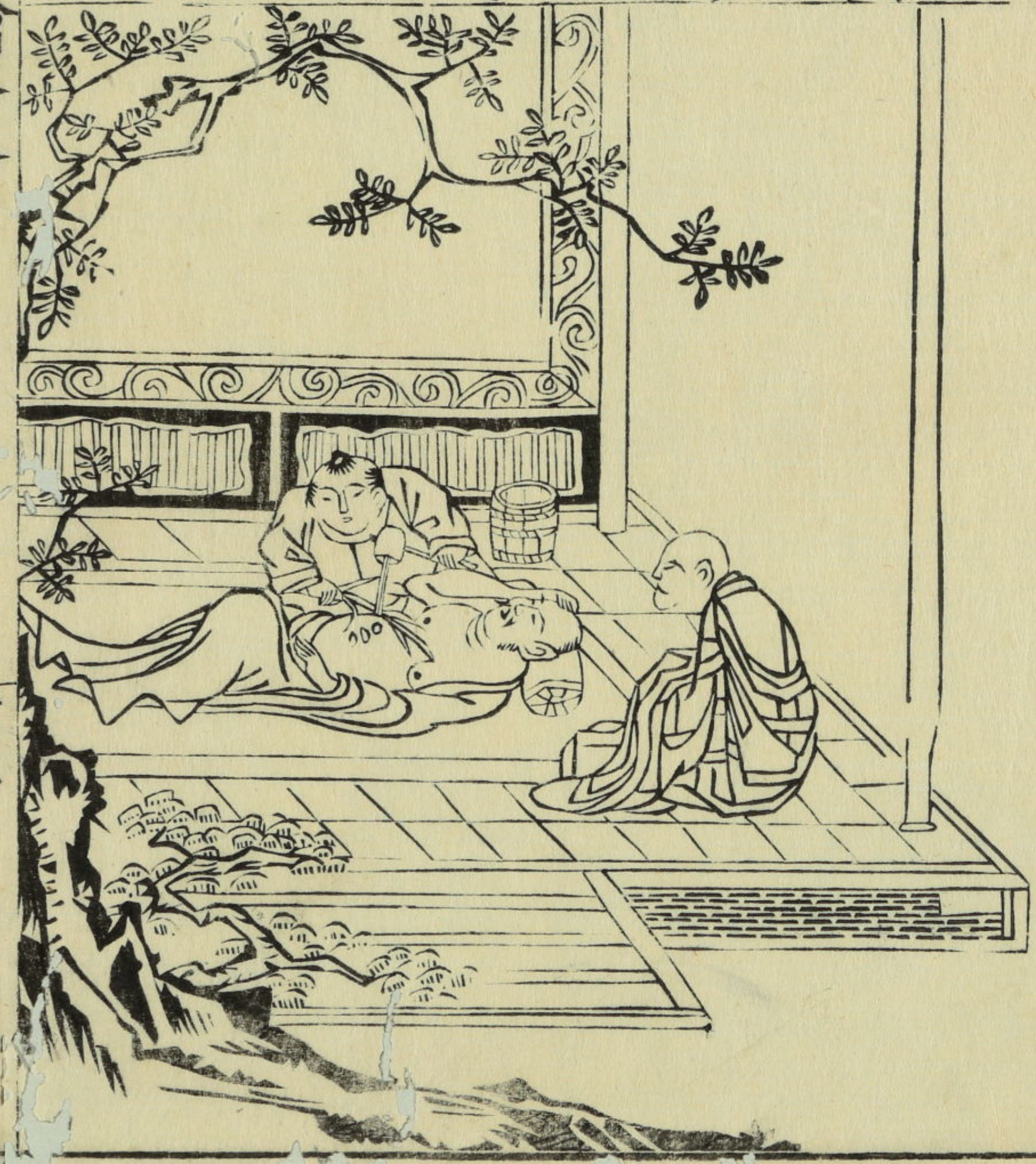
又またく、娘むすめ笑わらふ、これ今いま圖ずを、乃すなはち布ぬの袋うろに似にたりと
 比ひ内うちの又また希まれなり、子この衣え布ぬの袋うろなりや、汝な小こ姓せい
 氏しと伴ばんと、いれとわれと程ほどあり、し、是こゝろ小こ姓せいにて
 惟ただふ昔むかし仙せんと世よハ、天てん竺ぢくの南みなみにあり、海うみの北きたあり、
 袋うろ布ぬの、す、こゝろ、に方かたハ、八はち百里ひゃくり、今いま此こゝろ國くに
 窄せま使つかあり、こゝろ、に方かたや、八はち百里ひゃくり、今いま此こゝろ國くに
 小こ乃すなはち帝てい位ゐと、か、れ、と、こゝろ、に、今いま此こゝろ國くに
 と、大おほ身み王わうと、こゝろ、に、今いま此こゝろ國くに
 小こ乃すなはち、東とうと、風ふう皮ひ圍ゐと、こゝろ、に、今いま此こゝろ國くに
 と、金かね完かんと、こゝろ、に、今いま此こゝろ國くに
 布ぬの、小こ乃すなはち、世よハ、八はち百里ひゃくり、今いま此こゝろ國くに

一夜寢被斤る折瓦と何ひ三玉同時にふせ給へるが
 玉は一日も寢食とやまらざればさうふ佛通眼と
 いうべきありし彼とありしに想ひし給ひかの必に
 海くんとさる海ふがかの必の思ふ所水出の思
 念にて永後とくば其時佛通力と現してか
 葉と与り火身光輝深うたり給ひ微の
 法と況し由らばと御相より下乞馬ふつらと
 一ふらとくを利發出家と佛山流下して
 去らるる生と歡喜くふとさうして能去と
 まふとて彼製布と八千夜のとくひ一時は佛
 大年のまらるる又このまはも何法と傳く

皆山林小隠遊ぬ牙に昔のすりと二十年をん
 ばく農民まおまといは耕耘の業終る机
 ふちりんとん帝王廟と為る業と終る
 暇よりふらんとて死に老く死にり年斗
 然るまは海りま中の人民とて一子減せり
 更母同居とゆりまは昔の熟せぬととくう
 男のまより錢を嫁姑のまひり公乱まのひ
 殺伐より更あひし火勇まかの強助よ
 きまへ人民の縁死し金庫ふひのあり
 しとるあけと活ひたり佛又天流り微の
 の法と況し人とも火勇まの法と傳く

ともかく宿病ありしは因作席より所治ひ
 ぬ次の月見書と西作のまを引く燈泉よりり柳
 の枝とものごとく瘰癧を洗其時人面瘰癧と知く
 曰待我とあらふとありれ宿因ありお流れ心
 其時言量の記書現氣志く既と低くまの南ふ
 人面瘰癧白言我れ兆素と御くまのめこれ兆
 妖あり兆妖兆素と殺しその讎と執ると欲とめ
 まど七世はまどとめより前ハ佛法さうん行と
 讎とまよりとあらふらるる今げまどと
 憐れ公のさうりあり。まき瘰癧ありおし忠ひ瘰癧とあり
 讎としくんとはまどと今め病傷とあらふと

云月した慈
 大慈と感し
 今別立去
 ろとと終
 て瘰癧ハ忽
 消たりと
 西作ハま
 傷見書と
 礼一法ハ
 傷之見書
 色消去ぬ



繪本卷六

十五

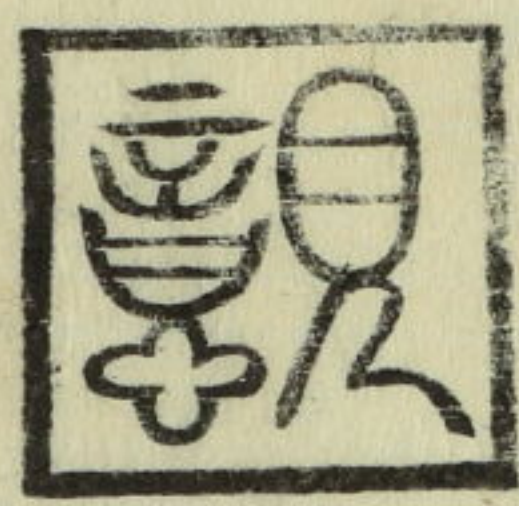
玉作 乞ふりいふく 憾は後漏を海ひと也 此書
首より楚莊終端ありて 楚王の仁心と感し 楚
末より 楚を人面の来由とありて 玉作乃 楚楚と
終る 予を中に 憾しきあり 拙きあり 卑きあり
あり 欠りありあり 楚國の 楚胡蘆の 楚ひの 楚に
ありて 同と 憾しきありて 楚ひの 楚ひの 楚ひの
孰く父神と 舎と 楚仁と 楚見んと

ふと
あり

繪本寶鑑後序

撰安由子訪予南華園茶談半日 不佞
曾識其人彼昔從五馬而臂蒼一且致
謝而漂泊蒼海速迷風塵而到于今雖
葆露于又莫雷同之私越交膝於紫標
寓形於青壁 不佞也 欣然于其間由子
解裝出一書披閱之元所見也此書也
嚮者在目錄而文詞支離無名可名矣

今而由子芟補於其闕文重字乃逐一窮其原且其辭女字而雖了角童蒙無囁嚅之累義理亦自歷々予始讀一項無味再讀二項覺薄味遂讀三項至于滋味直得其蔗之佳境也破畫也者出于雲舟之嫡流筆法誠活然非世之筆耕鴉点之碎焉蓋以口弄手翫之一法示師聖交賢之一階繪本寶鑑勒為之名實在此豈與謳歌流言之冊齊架耶惟夫令人得不俟一步而窺青燈樓之切慈之在裏許於乎子之用意也於世亦奚其幸矣也哉戊辰正月上浣隱市植村氏一敬子謹跋肯貞享五年也



鸞

東武

平楚屋

清三郎

書林

中華

小佐治

半危衛門

龜

攝陽

貫器堂

重之梓行

